

# 保養の現状、そしてこれから

原発事故被害者の救済を求める全国ネットワークシンポジウムin郡山

2026年1月26日

FoE Japan 矢野 恵理子



## 保養プログラムが生まれた経緯



311以降の日本政府の基準：  
「年**20mSv** 以下の地域に住む人は避難の必要はない」

本来：少なくとも公衆の被ばく限度を「年**1 mSv**」  
という国際勧告を守り、幅広く「**避難の権利**」を認めるべき

避難できない子どもと妊婦のために

**線量の低い場所で野外活動を**

そして、全国の市民団体の方々が、福島県や近隣県の子どもたちを呼んで野外活動を行う保養プログラムの開催を始めました。

# 自然体験・野外活動支援事業



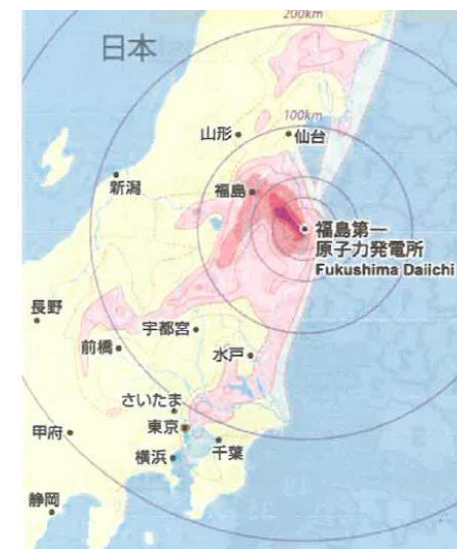
## 「原発事故子ども・被災者支援法」

放射性物質による放射線が人の健康に及ぼす危険について科学的に十分に解明されていないことを前提に、子どもたちの健康を、国が適切に支援することが定められた

基本方針に基づき予算化された

## 「ふくしまっ子自然体験・交流活動補助事業」

⇒現在「ふくしまキッズパワーアップ事業」



## チェルノブイリでの保養

チェルノブイリ原発事故後5年目

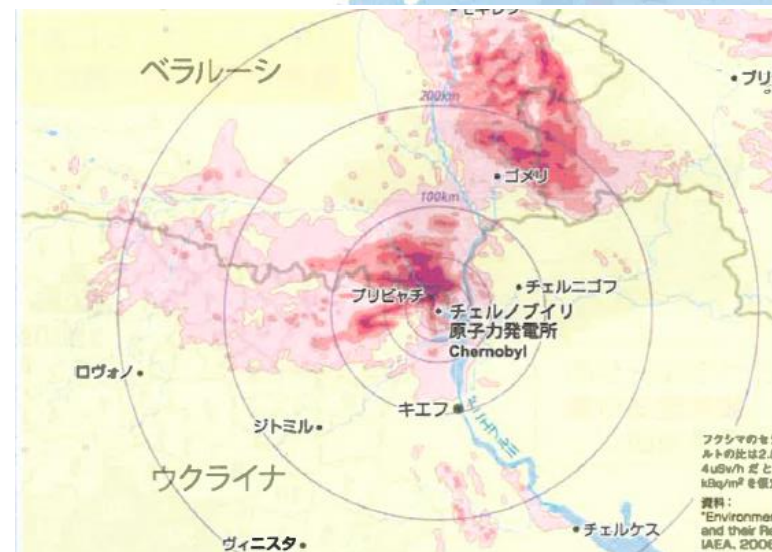
⇒ チェルノブイリ法

汚染地域に暮らす18歳までの子ども

**3週間／年 保養の権利がある**

ウクライナ 5万人(約15万人中)2012年

ベラルーシ 10万人(約15万人中)2013年



# 支援事業の内訳



## 被災者支援総合交付金

(福島県の子どもたちを対象とする自然体験・交流活動支援事業) 実績  
ほとんどが、小中学校や幼稚園・保育所の既存体験学習や遠足の費用

(千円)

年度	決算額	学校			保育園保育所			社会教育団体			計		
		数	うち県外	人数	数	うち県外	人数	数	うち県外	人数	数	うち県外	人数
平成26年度 (2014年度)	305,547	523	6	28,127	463	157	50,139	8	8	418	994	171	78,684
平成27年度 (2015年度)	314,408	523	2	27,597	505	166	55,244	11	11	233	1,039	179	83,074
平成28年度 (2016年度)	305,338	528	3	27,026	490	163	56,336	6	6	175	1,024	172	83,537
平成29年度 (2017年度)	219,192	515	3	26,439	464	158	54,129	5	5	104	984	166	80,672
平成30年度 (2018年度)	117,285	446	0	22,657	363	145	43,909	4	4	90	813	149	66,656
令和元年度 (2019年度)	65,947	309	0	17,557	53	0	5,053	1	1	13	363	1	22,623
令和2年度 (2020年度)	20,838	109	0	5,232	9	0	321	0	0	0	118	0	5,553
令和3年度 (2021年度)	29,000	122	0	6,389				0	0	0	122	0	6,389
令和4年度 (2022年度)	38,514	164	0	8,348				0	0	0	164	0	8,348
令和5年度 (2023年度)	36,794	167	0	8,729				0	0	0	167	0	8,729
計	1,452,863	3,406	14	178,101	2,347	789	265,131	35	35	1,033	5,788	838	444,265

資料：文部科学省生涯学習政策局青少年教育課より

## 保養団体の実態



- ◆ 全国保養実態調査報告書 2014年11月～2015年10月までの1年間  
リフレッシュサポートと311受け入れ全国が中心で調査

107団体 9000人の子どもたちが県外への保養に平均5.3日参加  
1回の保養で1人の参加者に、7万円以上の費用が掛かっている。  
(234以上の保養団体があることから、推定約15,000人が参加しているにとどまる)

**全国の保養団体は資金的・人的に疲弊している実態が明らかになりました。**

- ◆ 要望書提出 2017年6月26日  
全国104団体が、国と福島県に保養への  
公的支援をお願いする要望書を提出した。

国や福島県に要望書を提出するが  
国の政策や公的支援への道は遠く、市民  
団体が担うには、厳しい状況が続く。



## 保養団体の今

- コロナ禍、中止を余儀なくされ、3年4年が経過し、再開できない保養団体が少なからずある。
- 必要性を感じながらも、資金の集めにくさや担い手の高齢化、希望者とのマッチングが上手くいかないことや、不満を言うてくる親やトラブルを起こす参加者などに理由で、疲れてしまった保養団体に出会う。
- お母さんやお父さんと話す機会の多い団体や、保養団体同士の交流がある地域（関西や岡山、首都圏など）、地元の公的支援が得られている団体は、継続率が高いと思われる。



- たとえ、継続できなかつたとしても、今まで、福島の子どもたちとそのお母さんお父さんにたくさんの笑顔と元気を届けてきた多くの市民団体の方々に、本当に素晴らしい活動をありがとう、お疲れさまでしたと伝えたいと思います。

## 浜通りに新たに移住した子どもたちとその家族

- ・帰宅困難区域が解除された双葉郡には、子どもを連れて移住する人たちが増えています。  
廃炉作業や除染作業、建築土木関係や新しいイノベーションコースト構想の従事者など、家族を連れて転勤する方も少なからずいます。
- ・インフラが整わない中、親や頼れる親戚が近くにいない中、懸命に子育てをしています。
- ・自分たちが、事故当時そこいなかったことで、被害者ではないと思っていますし、子育て支援が手厚いため、好きでそこに暮らすことを決めたのだらうと思われ、放射能を気にすることを、福島以外の地域より口にしづらい環境だと聞きます。
- ・でも、子どもたちは野山で遊べるわけではなく、除染の対象外の自然が多くある地域です。
- ・正しい知識を伝え、子どもたちに安全な野外活動の場を提供することが必要です。そして、そこに暮らすことを決めた若い家族を私たちは、みなさまと一緒に、心から応援したいと思っています。

## 国や東電へ働きかけ続けなければならないこと

- 私たち保養団体は、日々の流れの中で、公的支援を少し諦めた気持ちになっています。
- 文部科学省の担当者は、頻繁に交代します。新しい担当者に、私たちのやってきたこと、やっていること、これからもやり続けなければならないことを伝えていくことが、とても重要だと考えます。
- 政府交渉で保養への公的支援をと、声を上げ続けなければならないと思います。





# 福島ぽかぽかプロジェクトとは

2012年からFoE Japanが実施している保養プログラムです。子どもたちに思いっきり野外で遊んでもらうこと、お母さんお父さんがリラックスして、ふだん語れない不安や疑問について語り合い、共有する場の提供を目指しています。

猪苗代の拠点を利用し始めて10年  
土湯温泉時代2500名 南房総・猪苗代を加えると  
今までに、のべ5400名を受け入れて来ました。

# 福島ぽかぽかプロジェクトの出来ること

- 3.11当時のことを覚えている子、その後のお母さんたちの大変さを知っている子ども、歴史として認識し、多くを知らない原発事故後に生まれた子どもたちに大きな違いがある。
- エネルギー講座を開いたり、再生可能エネルギーの勉強をしたり、環境やSDG,sやクライメイトジャスティスのワークショップなど、エネルギーを身近に考えることから原発事故を伝えていこうと考えた。
- また、水俣長崎学習旅行を実施、福島を外から見ることで、他の環境問題や被ばくを考えることに挑戦している。
- 当時、子どもを持たなかったお母さんの保養参加が増えている中、原発事故や放射能の怖さ、健康被害に関して、正しい知識を持たない方が増えていると感じたので、「福島で生きるのに、知っておきたいこと」のセミナーをぽかぽかでは毎回開催することにした。
- 双葉郡からの受け入れを年1回～2回開催予定。
- 他の保養団体と情報交換をしていきます（首都圏保養交流会など）